



白骨樹林

西村寿行



TOKUMA NOVELS

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五

電話四三三・六二三一 振替東京四一四四三九二

西村寿行

白骨樹林

Juko Nishimura ©1977

カバー装幀 集合den

本文挿画 山野辺進

落丁・乱丁はおとりかえいたします

77C30b

長篇ハードボイルド

白骨樹林 西村寿行



徳間書店

TOKUMA NOVELS

目次

プロローグ — 7

第一章 — 老謀者 — 12

第二章 — 真円の球 — 34

第三章 — 悪魔の巣 — 70

第四章 — パンドラの箱 — 100

第五章 — 巨船強奪 — 134

第六章 — 警察署襲撃 — 153

第七章 — 死の町 — 179

第八章 — マイコプラズマ — 217

国道238号線は宗谷海峡に面した宗谷岬を走っている。^{わっかない}稚内港が近い。

国道を横切る泊内川がある。その上流にモイマ山がある。二百四十メートル弱の低い山である。原野の中に山が何かのかげんで押し上げられたようにみえる。

広漠たる原野である。

原野といっても野原ではない。山地である。そこに小さな村があった。

村に行く道はない。

だれも村には近づかない。

村といっても家は十戸ほどしかない。しかし、各家々は立派な洋風建物であった。村の中心にかなりの規模の建物があった。鉄筋の二階建てで、広さは地方大学の建物ほどある。その建物を取り囲む家々はまるで本丸を護る砦のようにみえた。家々の外周には有刺鉄線が張ってある。

だれもその有刺鉄線から中には入れない。いや、村そのものに近づく者はない。道がないから、迷い込み

でもないかぎり、近づけないのだ。

十月のなかばだった。

一人の男が猟犬を連れてモイマ山をうろついていた。男の名前は加藤。

加藤は日曜ハンターだった。鴨を追ったり、野兎を追ったりしながら歩いているうちに方角を失ってしまっていた。方角を失いはしたが、別に困っているわけではなかった。いざとなれば犬に道案内させればよい。モイマ山に登った加藤は、原野の中に忽然と出現した村をみて驚いた。地図にもそんな村は記入されていない。

加藤は山を下りて村に向かった。

道のない原生林を縫いながらだから、村に近づくのは容易ではなかった。

小一時間ほど、歩いた。低地に下りると村は見えない。たしかそのあたりだと見当をつけたところまで歩いたが、行けども行けども、村はなかった。歩きながら加藤は蜃気楼ではなかったのかと思った。そうでなければ、目の錯覚だったのだ。アイヌ人の村ならとも

かく、地図にも道のないそんな山中に洋風建物群があるというのは、妙だと思った。

幾つかの原生林を歩いた。辿り着かねばならない理由はなかった。獲物に注意しながら加藤はぶらぶら歩いた。

遠くで銃声がした。

加藤はきき耳をたてた。銃声はライフルのようだった。散弾銃とライフル銃では音がちがう。たてつづけに数発、鳴った。

——ひぐま 熊か！

足を停めた加藤は、つぎの瞬間には走りだしていた。天塩てしおは熊の多いところである。とくに金毛といわれる凶暴な熊が多い。人や家畜の被害は毎年起きている。日曜ハンターの加藤に熊が撃てるわけがない。金毛と呼ばれる熊には身の丈三メートルを越すのがある。そんなのに散弾銃を向けても、叩き潰されるのがおちだ。しかし、加藤は根が乱暴な男だった。いちど熊に見参したいと思っていた。三十前で、血気盛んでもあった。走って原生林を出た。

原野がつづいている。原野といっても起伏がある。あちこちにエゾ松の林がある。見透しがきかない。銃声はそのあたりでさかんに湧き起こっていた。

加藤は息を切らして駆けた。

視界のきくところに出た。すぐ目の下で銃撃戦が行なわれていた。加藤は、はじめ、演習かと思った。数人ずつに分かれて撃ち合いをしている。まさか本気で殺し合っているのだとは思わなかった。しかし、それ弾が近くに飛んできて、ほんとうの殺し合いだと知った。撃ち合いをしているだいたいぶ向こうに、さっきの村がみえた。

——なんだ、こいつら。

加藤はあつけにとられてみていた。それぞれの男たちは凹地などの遮蔽物を楯にとって闘っていた。拳銃とライフル銃の混じった戦いであった。容易にかたがつきそうにない。まだだれも殺されていないようだった。

加藤は樹陰でみていた。

へ突撃しろ、突撃をへ

どちらかが突撃すれば一挙に肉弾戦となつてかたがつくのだ。加藤はつぶやいた。まどろこしい殺し合いだと思った。

だれがなんのために殺し合いをしているのか、そこまでは加藤は考えなかった。また考えてもわかりはしない。発見されて捲きぞえをくわない用心だけをして、見守っていた。

ヘリの音がした。

パタパタパタと鳴るローターの音をきいて、ふっと加藤はその方角をみた。村がある。その村の中央付近から一機のヘリコプターが舞い上がっていた。

ヘリはつんのめるように傾きながら、空を滑ってきた。すばやい動きだった。

HU1B——加藤は、ヘリだの銃だの戦車だのに詳しい。飛来したヘリがHU1Bだと見極めをつけたその矢先に、ヘリの窓から棒が突き出たのをみた。

棒が猛烈な銃弾を叩き出した。タタタタ——軽快な音が冬の大气を割いた。弾着が一本の棒のように地面に突き刺さった。その棒が往復した。まるで大粒の雨

足が走るようであった。62式機関銃だと加藤は判断した。口径が七・六二ミリで一分間に六百五十発、発射できる。

一瞬で一つの陣営は沈黙した。

ヘリは沈黙した頭上にパタパタと舞いかぶさった。数人の男が倒れている。それを見届けて、ヘリは高度をとった。相手側の男たちが突撃してきた。突撃してきても、もう敵は死滅している。とどめを刺す銃声が七発、鳴った。

そのときになって、加藤は恐怖を感じた。演習ではないことがはっきりした。残忍な殺しであった。とどめを刺すという行為にそれがあらわれていた。

——危険だ。

そーと、樹陰を出た。悟られないように原生林に逃げ込まねばならない。

加藤の体が凍った。そのときになって、何を思ったのか愛犬のケン号がヘリコプターに向かって吠えたてた。顎を振りたてて吠えた。

「コラッ、黙れッ、バカ！」

あわてて、加藤はケン号の口を押えた。

銃声が一発、空に向いて鳴った。ヘリへの合図らしかった。ヘリがゆっくり弧を描いて加藤の潜む繁みに向かってきた。

「逃げろ！」

ケン号を放して、加藤は繁みを突っ走った。原生林までは四、五百メートルある。そこへ逃げこめば、ヘリは役にたたない。懸命に突っ走った。文字通り、こけつまろびつであった。ケン号は軽快に繁みを切って走った。三十メートルと走らないうちに、ヘリの轟音はすぐ頭上に迫っていた。

加藤は振り返った。機銃が突き出している。それが照準を定めて動いていた。恐怖で喉が引きつれた。灌木の繁みに這い込み、しかし、轟音に追いたてられてつぎの繁みに、鼠のように走った。

機銃が鳴った。空気を引き裂くはげしい音が耳元にきこえた。

前方を、尾を股に挟んで逃げていたケン号の白い体が、ボンと空中に浮いた。水袋を破ったようにケン号

の体から鮮血が空間に飛び散った。ボロ雑巾のようにひしゃげたケン号の体が大地に叩きつけられた。

「や、や、やりやがったな！」

加藤は愛犬を殺されて逆上した。振り向きざまに二連銃をへりに向けて発射した。へりの操縦者の顔がみえる。その顔に散弾が襲いかかった。しかし、アクリル樹脂の風防ガラスは、散弾では致命傷とはならない。機銃が鳴りひびいた。

加藤はつんのめった。一瞬でこと切れた。死ぬ前に、網膜に血の海の拡がったのをみた。

第一章

老謀者

I

叶捨吉^{かろう}は個人タクシーの運転手だった。

十月二十六日の午後、叶捨吉は車を新宿区四谷の有料駐車場に停めた。そこから歩いて新宿御苑に向かった。

日曜日だった。御苑は子供たちで賑わっていた。恋人同士らしい男女も多い。叶捨吉は目を細めて子供た

ちの走り回るのを眺めながら歩いた。

正門からぶらぶら歩くと、広大な芝生に行きあたる。その芝生は遊んでよいことになっている。何百組もの家族や団体がゴザを敷いて弁当をたべていた。その周辺では子供たちが走り回っている。ボール遊びをしている団体もある。

叶捨吉はほどよい場所を選んで腰をおろし、弁当を拡げた。

秋の陽がきらめいて落ちている。



叶捨吉は無心に食べた。そこへボールが飛んできた。風船ボールだった。叶捨吉の頭に当たった。叶捨吉は食事をやめてボールを取った。

傍で父娘がキャッチボールをしていた。その父が投げたボールだった。五、六歳の娘が駆け寄ってきた。叶捨吉は笑いながらボールを渡してやった。

父親がやってきた。

「これは、とんだごぶれいを……」

「なんの」

五十前後の恰幅のよい男だった。朗らかな表情をしている。

その男はすぐ隣の自分のゴザに戻って、酒を持ってきた。ゴザには母親らしい老女と妻らしい気品のある女がいた。

「いっばい、どうです」

男は傍に腰を下ろした。

「車を運転するものですから」

叶捨吉は断わった。

「ご老人——」

男は、自分で注いで口に運んだ。声がきびしく、低くなっていた。そのくせ、顔は明るい笑みを浮かべている。

「なんじゃな」

叶捨吉は弁当を終えて、タバコをくわえた。煙を空に吐き出した。

「すぐに、出発してもらいたい」

「どこに」

「北海道の〈極地医学研究所〉だ。宗谷岬の近くにある」

「それで……」

「御苑正門で部下がタクシーを待っている。その男を乗せて入間基地に行ってもらいたい。そこにジェット機が離陸態勢をとっている。研究所にパラシュート降下をしてもらいたい。パラシュートは、だいじょうぶかな……」

「さあて、な」

叶捨吉は、ちらと男をみた。男は平賀俊一。防衛庁所属の調査機関、陸幕二部別室の調査第一部長。

陸幕二部別室は陸上自衛隊から約六百名、海上自衛隊から約二百名、航空自衛隊から約二百五十名が出向している。事務官もいれると千余名の陣容である。国内、国外、共産圏の情報収集、分析、通信傍受などが主たる任務である。年間予算が十億を超す。内閣調査室と密接な関係にある。

「研究所から超極秘の品物を、九州のN基地に運んでもらいたい」

「……」

叶捨吉は黙ってタバコを喫った。

その横顔に皺ひだが深い。平賀はだれがみても談笑しているように、笑みを絶やさなかった。

叶捨吉——平賀たちの大先輩であった。旧関東軍情報組織の生き残りだ。中野学校二俣分校卒。歳は六十を過ぎている。

叶捨吉は陸幕二部別室に籍はない。個人タクシー協会以外には、どこにも籍はない。

必要なときにだけ動いてもらう、切り札であった。陸幕二部別室所属の情報員はすべて他国の情報機関に

写真が配られていた。重大機密のときには情報員は使えない。外部から起用する。その際のとっておきが叶捨吉であった。老いてはいるが、その勘と、行動力はなみの情報員にはないものを持っていた。

「敵は？」

叶捨吉はもの静かに訊いた。

「CIAとKGBだ。死物狂いになっている。すでに十数人もの死人が敵味方に出ている」

「そうですか」

「一つだけ、いっておく」

平賀は両手を上げて大きなあくびをした。

「敵は執拗に追いつがるだろう。だが、いかなることもあっても、荷物は敵の手に渡すな。必要なら、何人でもかまわん、殺せ」

「そうですか」

「以上だ」

平賀は立って、屈伸運動をはじめた。

「じつに、いい日和ですな」

平賀は大声を出した。